

粕屋町文化財調査報告書第 41 集

戸原寺田遺跡

2017

粕屋町教育委員会

はじめに

本書は、県道福岡環状線歩道拡幅工事に伴い、平成28年度に粕屋町教育委員会が実施した、粕屋町大字戸原に所在する戸原寺田遺跡の記録です。

調査地周辺は古代の遺跡が多く存在し、縄文時代から弥生時代にかけての過渡期の遺跡である江辻遺跡をはじめ、粕屋平野で古い様相を示す前方後円墳である戸原王塚古墳、多くの倉庫群を検出した戸原御堂の原遺跡などの遺跡が周囲にあります。また、約1200年の永きに伝統が残る伊賀葉師堂が調査地の北側約40mに位置し、調査地近辺は古代から非常に栄えた地域であったことがうかがわれます。

このような立地環境のもと、本遺跡の調査で紡織や鍛冶に関連する遺物や遺構が出土したことは、この地域の評価を考える上で非常に重要であったと思われます。しかしながら、遺跡全体のうちのわずかな範囲を調査したに過ぎず、本遺跡がどのような位置付けをすべきかは、今後の周辺地域の調査によって次第に明らかになっていくことと思います。本書が郷土の歴史に誇りを持ち、文化財に対する理解を深める上で広く活用されるとともに、研究資料としても貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の方々をはじめ、近隣住民の皆様は心から謝意を表します。

平成29年3月31日
粕屋町教育委員会
教育長 西村 久朝

01 経過・位置と環境

- 01 調査に至る経過
- 03 調査体制
- 03 地理的環境
- 03 歴史的環境

04 調査成果

- 04 調査概要
- 04 溝状遺構
- 11 土坑
- 15 その他の遺構
- 18 おわりに

19 図版

碑図

- 01 第1図 戸原寺田遺跡周辺図 (1/25000)
- 02 第2図 戸原寺田遺跡周辺図 (1/15000)
- 03 第3図 戸原寺田遺跡周辺図 (1947年米軍撮影の空中写真)
- 04 第4図 第1号溝平面図、土層図 (1/60)
- 05 第5図 戸原寺田遺跡全体図 (1/300)
- 06 第6図 第2号溝平面図、土層図 (1/60)
- 06 第7図 第2号溝出土遺物実測図 (1/4)
- 07 第8図 第3号溝平面図、土層図 (1/50)
- 08 第9図 第3号溝出土遺物実測図 (1/4)
- 09 第10図 第3号溝出土遺物実測図 (1/4、1/3)
- 10 第11図 第4号溝平面図、断面図、土層図 (1/30)
- 10 第12図 第4号溝出土遺物実測図 (1/4)
- 12 第13図 第1号土坑平面断面図、第2号土坑平面図、土層図、SP20土層図 (1/30)
- 13 第14図 第1号土坑出土遺物実測図 (1/4)
- 14 第15図 第3号土坑平面図、土層図 (1/50)
- 14 第16図 第3号土坑出土遺物実測図 (1/4)
- 14 第17図 第4号土坑平面図、土層図 (1/30)、出土遺物実測図 (1/4)
- 15 第18図 鍛冶遺構平面図、土層図 (1/30)
- 16 第19図 包含層出土遺物実測図 (1/4、1/2)
- 17 第20図 包含層出土遺物実測図 (1/4)

周辺の調査遺跡

戸原塚ノ内遺跡 『戸原塚ノ内遺跡』福岡県教育委員会 1993
戸原塚ノ内遺跡第2地点 『戸原塚ノ内遺跡第2地点』粕屋町教育委員会 2007
戸原御堂の原遺跡 『戸原御堂の原遺跡』粕屋町教育委員会 2000
戸原寺田遺跡 本書

特別調査事業

伊賀葉師堂『伊賀葉師堂の歴史』粕屋町文化財調査報告書 第29集 2009

発行 粕屋町教育委員会

調査起因 県道拡幅工事

現地調査 平成28年4月14日～平成28年6月4日

整理調査 平成28年6月5日～平成29年3月31日

使用方位 国土庁標第Ⅱ系(世界測地系)

遺構実測 高橋幸作・阿部悠理

遺構/遺物撮影 高橋幸作

遺物実測 福島日出海・阿部悠理・常盤拓生

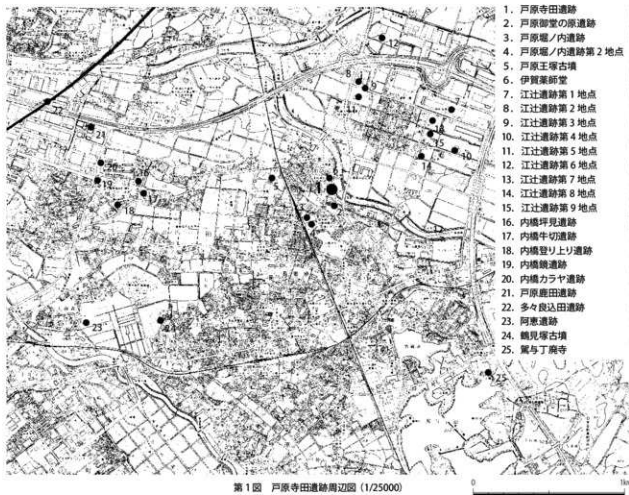
製図 高橋幸作

執筆/編集 高橋幸作

本書に関わる遺物・記録類は、粕屋町立歴史資料館にて収蔵・管理し、公開する予定である。

経過・位置と環境

調査地北側には間基 1200 年と伝えられる伊賀楽師堂（東園寺）が所在し、南側には 6 世紀から 11 世紀にかけての倉庫群が発見された戸原御堂の原遺跡が位置する。北東側には、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡である江辻遺跡が確認されている。



第 1 図 戸原寺田遺跡周辺図 (1/25000)

調査に至る経過

戸原寺田遺跡は、福岡県糟屋郡粕屋町大字戸原寺田 98-1 他において、県道福岡東環状線の歩道拡幅工事が計画されたことに起因する。

平成 26 年 10 月 3 日に、粕屋町役場道路環境整備課より粕屋町教育委員会へ埋蔵文化財事前審査願書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である戸原寺田遺跡に含まれる旨を回答し、平

成 26 年 10 月 17 日に確認調査を実施したところ、古墳時代と考えられる遺物包蔵層を確認した。

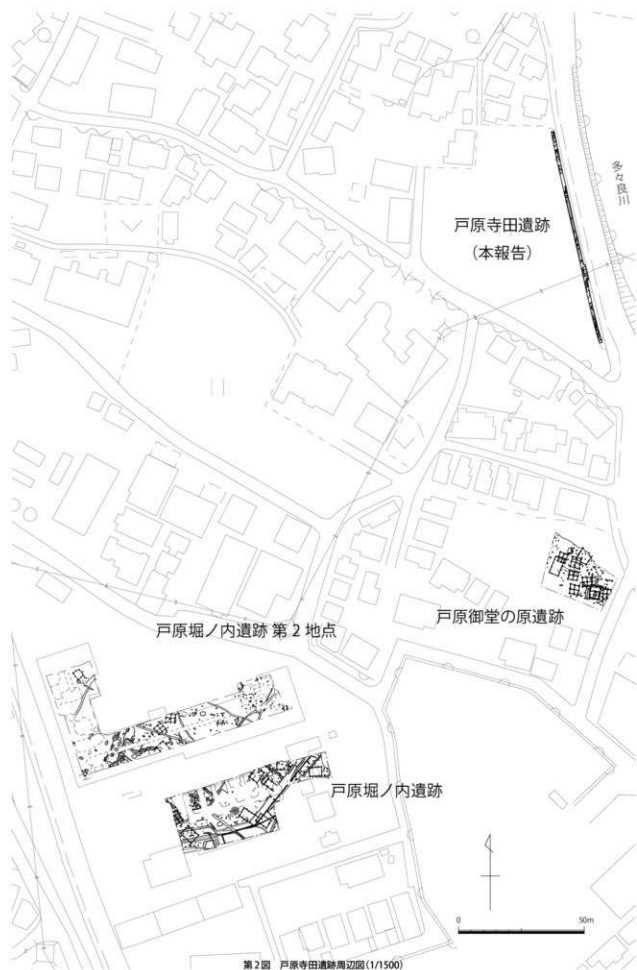
確認調査の結果をもとに粕屋町役場道路環境整備課と協議を重ねたが、工法計画の変更は難しく、記録保存の発掘調査を実施し、調査終了後に工事を着手することとした。

発掘調査は平成 28 年 4 月 14 日から平成 28 年 6 月 4 日の期間において実施した。

報告書作成に係る出土遺物整理作業

は、平成 28 年 6 月 5 日から平成 29 年 3 月 31 日の期間において実施した。出土遺物及び四面・写真等の記録類は粕屋町立歴史資料館にて保管している。

調査報告書を作成するにあたり、岡山理科大学亀田修一教授、九州歴史資料館小林哲氏、福岡市経済観光文化局菅波正人氏より貴重なご意見、ご指導をいただいた。記して感謝の意を表します。



第2図 戸原寺田遺跡周辺図(1/1500)

調査体制

平成 28 年度（調査・報告書作成）

調査主体 粕屋町教育委員会

教育長 西村久朝

教育委員会事務局次長 大石進

社会教育課長 新宅信久

社会教育課文化財係主任 西垣彰博

同係主任 高橋幸作（調査・報告書担当）

同係嘱託職員

阿部悠理、福島日出海、松永メイ子

地理的環境

福岡県糟屋郡粕屋町は、福岡市の東に隣接し、粕屋平野の中央に位置している。町域は 14.12km²と小さく平坦な地形である。

粕屋平野の西は博多湾に面し、南側は太宰府市の四王寺山系から伸びる月隈丘陵によって福岡平野と区別される。東側の三郡山系、犬鳴山系を源とする 3 本の河川が平野を貫流し、北から多々良川、

須恵川、宇美川の順で博多湾へ注いでいるが、山地から舌状に派生する丘陵が多く伸びているため、沖積地は河川流域に限られている。また、平野の北側には立花山系があり、博多湾に面して周りを山地で囲まれた小さな平野である。

戸原寺田遺跡は、粕屋平野のほぼ中央に位置し、多々良川左岸の低段丘陵の斜面下に立地する。標高は約 10m、多々良川までの距離は約 20m である。

歴史的環境

戸原寺田遺跡周辺は、本道跡の北東側、多々良川をはさんだ対岸の内陸部には江辻遺跡が存在する。縄文時代晩期から弥生時代早期にかけての遺跡である。松菊里聖住居が発見され、縄文時代から弥生時代への過渡期の解明に大きく寄与する遺跡として重要である。

弥生時代では、内橋鏡遺跡や新大開池遺跡、戸原塚 / 内道跡第 2 地点などで奥棺墓の出土が確認されている。

古墳時代に入ると、多々良川下流域には前期前方後円墳である戸原王塚古墳や

内橋カラヤ古墳などが築造される。戸原王塚古墳は本道跡の西約 400m に位置している。その後、盟土墳の造営は見られなくなるが、後期になると全長 80m 級の前方後円墳である鶴見塚古墳が突如築造される。「日本書紀」によると、528 年磐井の子である葛弓が、磐井の乱に連累した罪を免れるため、糟屋屯倉を献上したとされる。比定地については、古吉野渡部田圃遺跡が候補地のひとつに挙げられているが、鶴見塚古墳は、墳丘規模や石室構造等が那津官家の菅笠の墓ともいわれる福岡市の東光寺剣塚古墳と共通する部分が多い。鶴見塚古墳が、箱崎の内海から須恵川を遡上した場所に位置する立地も非常に示唆的である。

古代については、戸原御堂の原道跡が本道跡の南 80m の地点に位置する。6 世紀末から 7 世紀前半までの倉庫群や掘立住居が確認されており、本道跡出土土器も同様の年代を示しており、関連が強い遺跡である。

その後、阿志遺跡で糟屋郡（評）衙と考えられる政庁と正倉群が見つかった。現在も調査中であるが、7 世紀代の糟屋評跡に遡ることが明らかになれば、698 年に製作された国宝京都妙心寺覚鐘の金文で知られる「糟屋評造春米連広國」が政務を行っていた役所跡として判断できる。糟屋評は評造名が判明している数少ない評衙であり、文字資料による人物名と考古学的調査による遺跡比定地が合致する全国的に見ても稀有な事例となる。

また、本道跡の北約 40m の位置に開基 1200 年と伝承の残る伊賀業師堂（東照寺）が存在する。延暦二十四（805）年に原澄が業師如來像を安置したと山本院縁起書で伝承されている。開基当初は講堂、齋坊を備えた大伽藍であったと伝えられ、本道跡の名称である「寺田」も伊賀業師堂の寺域にまつわる地名と考えられる。

また、本道跡の横を流れる多々良川河口付近には多々良田遺跡がある。掘立柱建物群と多くの船載品や、役人の存在を示す石帯などが出土している。立地環境と多様な出土品を考えると港湾施設としての性格が想定できる

粕屋町周辺は、糟屋屯倉、郡衙、寺院など、古代史を考える上で鍵となる重要な要素をもっている地域といえるだろう。



第 3 図 戸原寺田遺跡周辺図（1947 年米軍撮影の空中写真）

調査成果

調査区中央に第3号溝（大溝）が確認でき、溝の最下層から紡織に関する木製品が出土した。また鍛冶関連遺構も検出し、手工業生産に関わる集団が本道路周辺にいたことが考えられる。調査範囲が狭小であったため、全容の解明には至らなかったが、今回の調査で得られた知見について以下に評述する。

調査概要（第5回）

今回の調査では、車道の歩道拡幅に伴う調査であったため、申請範囲内の最西端に沿うようにバックホーのバケット幅分、約1.2mを調査範囲とした。調査地の東側は高さ1m～3m程の車道の擁壁と隣接しているため、崩落防止を考慮しての設定となった。

今回の調査では、調査範囲が狭小ながらも、溝状遺構4条、土坑4基、小穴数基、鍛冶関連遺構を検出した。その中でも第3号溝は、幅7.7mの大溝であり、木製品も出土している。第4号溝は土器が重なって出土しているが、出土状況からその状態で被熱したと推定され、祭祀遺構と判断される。また、須恵器や赤焼土器、半島由来の土器など、多くの遺物が出土した。

溝状遺構

第1号溝（第4図）

調査区の南側で検出し、N-9.2°-Eの方位をとる南北溝である。幅0.5m、長さ3.4m以上、深さ0.4mを測る。北側は調査区外に伸びており、南側は第3号土坑に切られる。基底層は均一の高さであった。断面形はU字状となり、埋土はオリブ褐色土の単層である。出土遺物はない。

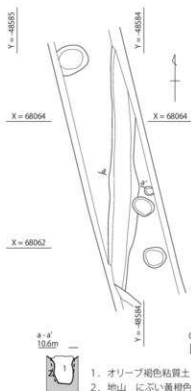
第2号溝（第6図）

調査区の北側で検出し、N-76.8°-Wの方位をとる東西溝である。幅1.9m、深さ0.3mである。東西ともに調査区外に伸びる。断面は台形状を呈す。埋土は灰黄褐色粘質土と明黄褐色粘質土が堆積する。基底層は均一の高さである。

第2号溝出土遺物（第7図）

1～5は須恵器の坏身。1は口縁部の立ち上がり部。口縁端部に明確な段がある。2は口縁端部の段が消失する。立

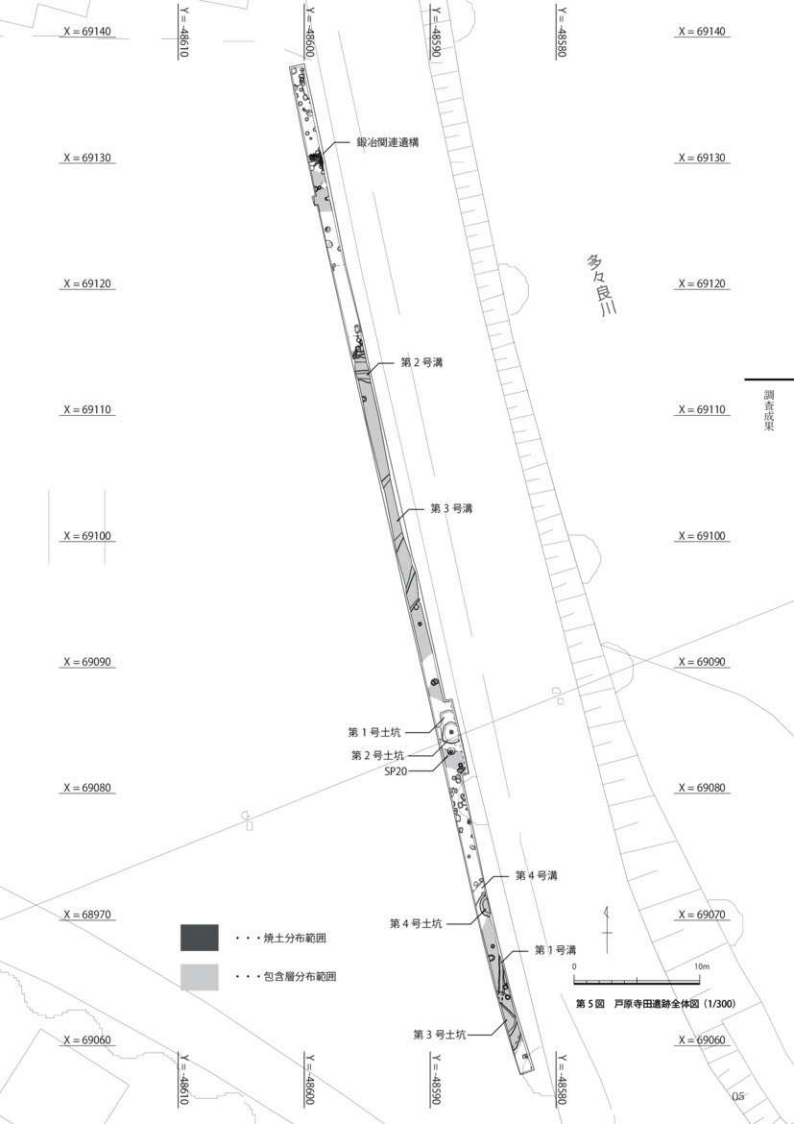
ち上がり部はやや屈曲する。3は復元口径13.3cm。4は底部外面は回転ヘラケズリ。色調は灰白色であり、焼成は不良。口径11.0cm。器高4.6cm。5は底部外面は回転ヘラケズリ。色調は青灰色だが、一部自然輪の付着が見られる。口径10.5cm。器高3.3cm。3～5は立ち上がり部と受け部の境目に溝状の凹みがある。6、7は土師器。6は高坏の脚部。内外面ともにナデ。復元底径は11.0cm。7は甕。外面は荒いハケメで、内面はヘラケズリ。胴部最大径は25.0cm。残高25.4cm。8は軟質系土器



第1号溝全景（南から）

1. オリブ褐色粘質土 (25Y4/6) に暗灰色粘質土を少量含む
2. 地山 にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/4) に暗灰色土 (10YR4/1) を少量含む

第4図 第1号溝平面図、土層図 (1/60)



多々良川

鍛冶関連遺構

第2号溝

第3号溝

第1号土坑

第2号土坑

SP20

第4号溝

第4号土坑

第1号溝

第3号土坑

- . . . 焼土分布範囲
- . . . 包含層分布範囲



第5図 戸原寺田遺跡全体図 (1/300)

X = 69140

Y = 48610

Y = 48600

Y = 48590

Y = 48580

X = 69140

X = 69130

X = 69130

X = 69120

X = 69120

X = 69110

X = 69110

X = 69100

X = 69100

X = 69090

X = 69090

X = 69080

X = 69080

X = 68970

X = 69070

X = 69060

Y = 48610

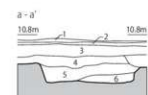
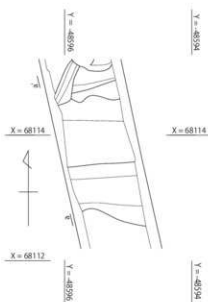
Y = 48600

Y = 48590

Y = 48580

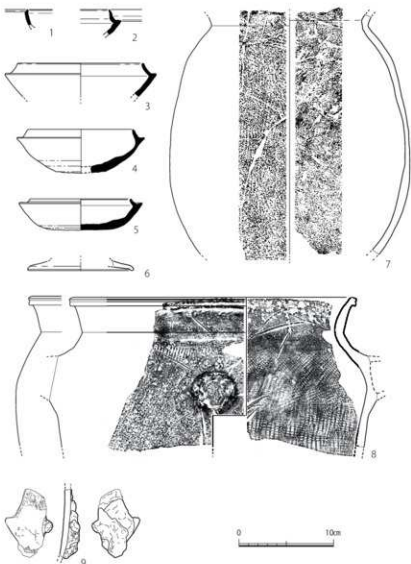
X = 69060

D5



1. 表土 ぶいぬ色粘質土 (7.5YR5/3)
2. 床土 明褐色粘質土 (10YR6/6) にしまりが強い
3. 包含層 灰褐色粘質土 (7.5YR6/2) に果の斑点が混じる
4. 包含層 褐灰色粘質土 (5YR5/1) に明赤褐色土 (5YR5/8) が縦に筋状に混じる
5. 灰褐色粘質土 (7.5YR4/2)
6. 明黄褐色粘質土 (10YR6/8) に黒褐色粘質土 (10YR3/1) を含む

第6図 第2号溝平面図、土層図 (1/60)



第7図 第2号溝出土遺物実測図 (1/4)

の可能性がある把手付きの甕。外面は口縁部から頸部にかけて横ナデ、頸部から下位が斜位のタタキ、内面が楕字状の当て具痕。把手部は接合面の観察から中空になると考えられる。色調は外面が褐色、内面がぶい褐色。復元口径 29.7cm、残高 15.8cm。9 は不明な遺物。土器とされる扁平な板状の物質に焼土が附着している状況がみられる。鍛冶や造陶関連遺物の可能性がある。板状物質の表面は明灰白色、焼土部は明赤褐色。全長 7.3cm、幅 5.0cm。

第3号溝 (第8図)

調査区の中央部に位置し、方位はN-47.1°-Eである。包含層の下層から検出した。想定される溝の幅は7.7mであり、大溝である。深さは0.9m。

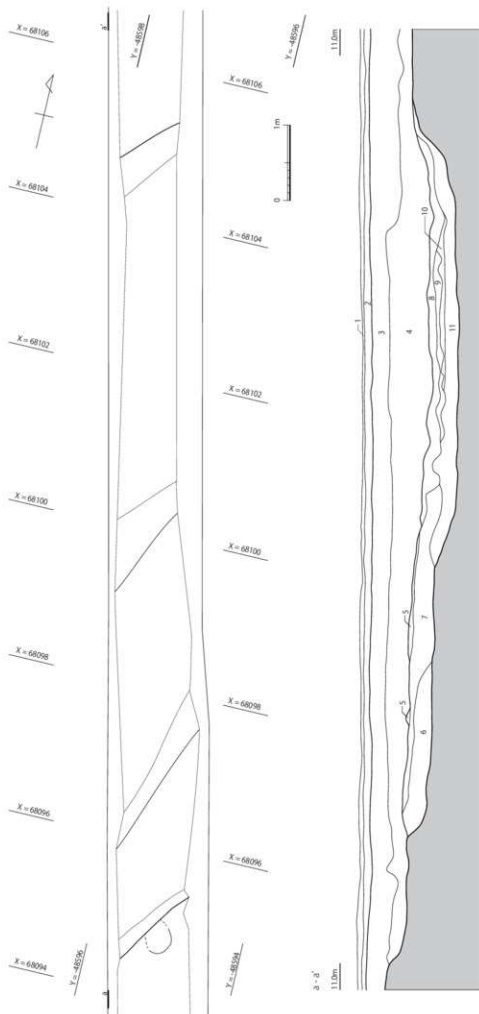
南側のみ3段掘りとなり、標高10.4mと10.2m、9.7mの3箇所に肩部があり、2つのクラスが作出される。溝の北側肩は標高10.1mであり、南側2つ目の肩部と近い標高値を示す。

基底部は平坦であり、幅は3.6mと広い。4層掘削段階から湧水が確認でき、最下層の11層から木製品が出土した。

第3号溝出土遺物 (第9、10図)

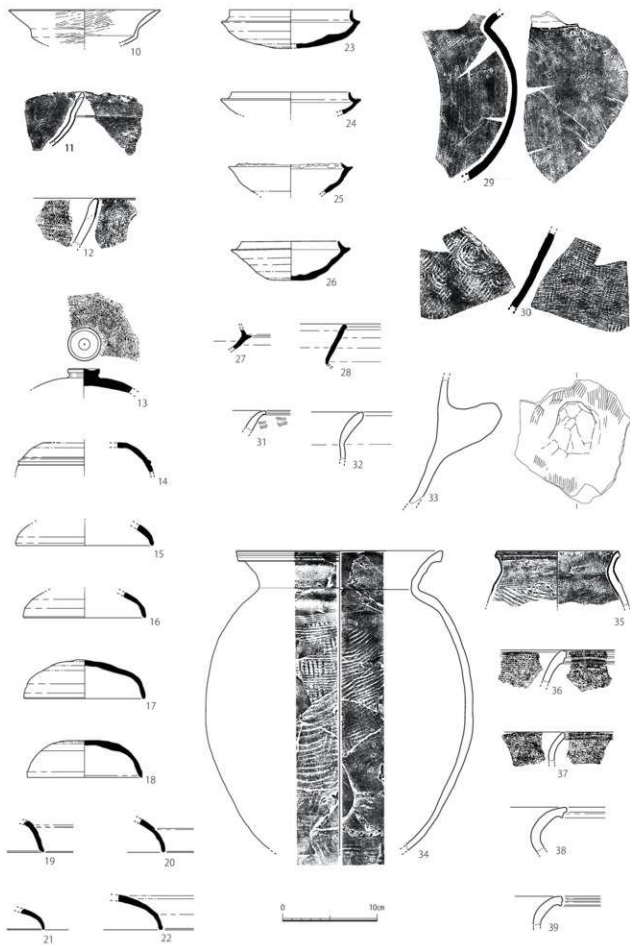
湧水の影響で層位ごとの遺物取り上げができず、第3号溝出土遺物に包含層4層出土遺物も一部含まれている。

10～12は縄文土器。10は精製浅鉢。内外面ともにヘラミガキ。色調は明赤褐色、焼成は良好。復元口径16.0cm、残高3.6cm。11は精製浅鉢。波状口縁を呈す。色調は明赤褐色、胎土は細砂粒を含むが精良。12は粗製深鉢。内面下位は強い横位のナデ、外面上位は横位のナデ、下位は斜位のナデ。色調は黒褐色、焼成はややあまく軟質気味。13～30は須恵器。13は有蓋高坏の蓋。つまみは横ナデ、天井部外面はカキム。14～22は坏蓋。14は体部に明確な段を有する。天井部は回転ヘラケズリ。色調は内外面ともに青灰色、断面は赤灰色。15は復元口径14.3cm。16は復元口径12.7cm。17は口径12.0cm。14～17は体部と天井部との境が明確である。18は口径12.6cm。17、18は天井部外面は回転ヘラケズリ。19は口縁端部に明確な段を、体部に沈線状の段を有する。20は口縁端部を丸く収め、体部に

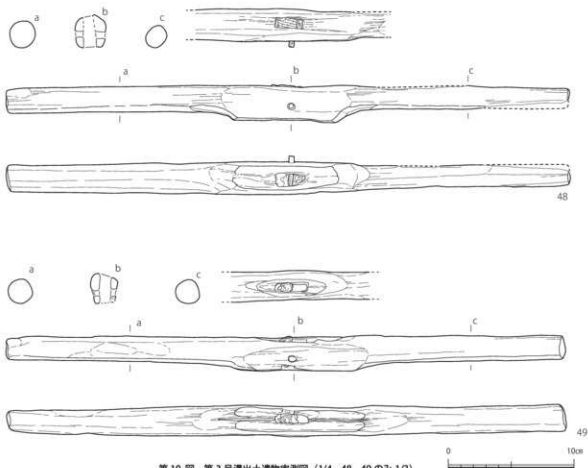
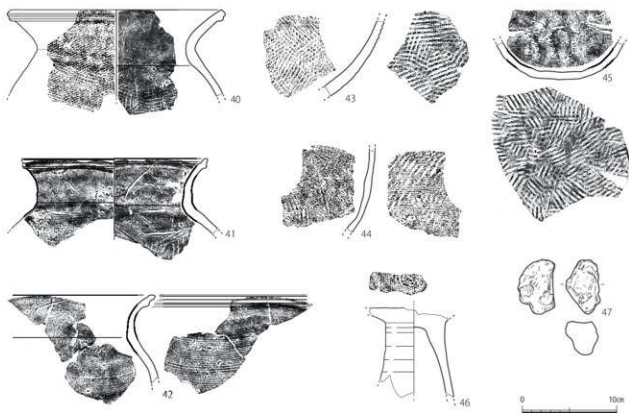


1. 表土 じょうい、褐色粘質土 (7.5YR5/3)
2. 床土 明黄褐色粘質土 (10YR6/6) しまりが強い
3. 包含層 灰褐色粘質土 (7.5YR6/2) に黒の斑点が混じる
4. 包含層 褐色粘質土 (5YR5/1) に明赤褐色土 (5YR5/6) が縦に筋状に混じる
5. 腐灰色粘質土 (2.5Y5/7) に黄褐色粘質土 (2.5Y7/4) をプロック状に含む
6. 黒色粘質土 (10YR2/1) に黄褐色粘質土 (2.5Y7/4) と明赤褐色土 (5YR5/6) を少量斑状に含む
7. 灰色粘質土 (N4/0) に明赤褐色土 (5YR5/6) が斑状に混じる
8. 暗灰色粘質土 (2.5Y5/2) に一部褐色土 (7.5YR6/6) が斑状に混じる
9. 灰色粘質土 (10Y5/1) に明赤褐色粘質土 (5YR5/6) と暗灰色粘質土 (7.5Y5/6/7) が斑状に混じる
10. 褐色粘質土 (7.5YR5/7) に黒色粘質土 (7.5YR1/7/1) が混じる
11. 明灰色粘質土 (N3/0)
地山 オリーブ黄色粘質土 (2.5Y6/3) に明赤褐色土 (5YR5/8) が斑状に混じる

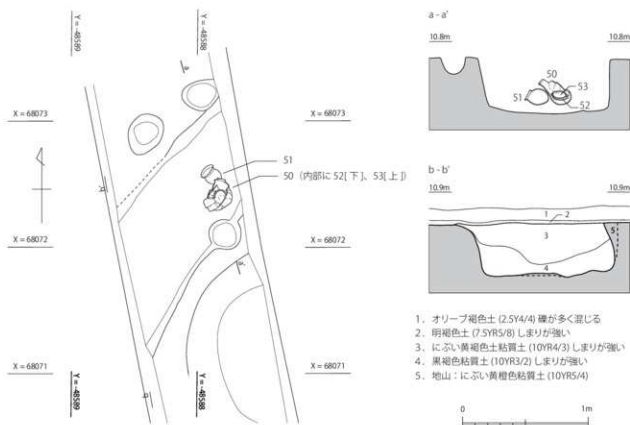
第8図 第3号調査断面図、土層図 (1/50)



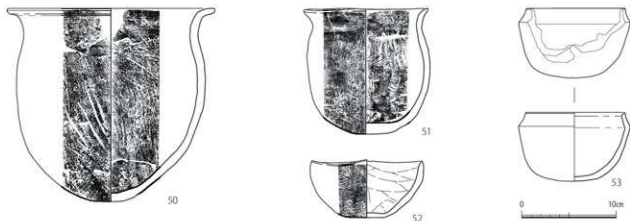
第9図 第3号溝出土遺物実測図 (1/4)



第10図 第3号溝出土遺物実測図(1/4、48、49のみ1/3)



第11図 第4号溝平面図、断面図、土層図 (1/30)



第12図 第4号溝出土物実測図(1/4)

沈殿状の段を有する。23～27は坏身。23は口縁端部を丸くおさめ、立ち上がりがS字状を描く。口径13.0cm、受け部形14.6cm、立ち上がり高1.2cm、器高4.1cm、24は立ち上がり高は0.8cmと短い。復元口径12.4cm、復元受け部径14.8cm、残高2.4cm。23、24は立ち上がり部と受け部の境に溝状の凹みを有する。25は口縁部に打ち欠いたような剥離痕がみられる。復元口径は

11.0cm、受け部径13.0cm。28、29は提柄か横柄。28は口縁部で、残高4.3cm、29は外面にカキメを施す。内面は一部当て具痕が残る。30は外面に斜位のタタキの後に横位のカキメを施す。31～33は土師器。31、32は甕の口縁部。31は口縁部が短く外反する。外面はハケメを施した後に丁寧にナデ消す。内面は横位のナデ。32は磨減により調整不明。焼成が甘く軟質。33は頸の把手部。

外面はハケメの後にナデ消し、内面はヘラナデで仕上げるが、指オサエを残す。色調はにぶい黄褐色。34～46は赤焼土器。34～45は甕。34は口縁部から頸部にかけて内外面ともに横ナデ。外面の体部にタタキを施し、上位はタタキの後にカキメを施す。内面は平行当て具痕が残る。口縁部は2条の沈殿がみられる。復元口径は21.8cm、残高は31.6cm、胴部最大径は28.3cm。35は頸部から

体部に斜位のタタキの後に、頭部下位にカキメを施す。内面はナデ。色調はにぶい褐色だが、全体的に黒く変色している。内面はコグ、表面はススの可能性が高い。復元口径 12.7cm。36 は外面口縁部下位に突帯を 2 条施す。内外面ともにナデ。色調は褐色。37 は外面口縁部下位に沈線 1 条、頭部付近にタタキを施す。他は横位のナデ。色調はにぶい赤褐色。38、39 は外面口縁部に強いナデにより凸線状の高まりを 1 条施す。38、39 とともに、内外面ナデ。色調は、38 はにぶい黄褐色、39 は暗灰黄色。40 は外面口縁部下位に凸線を 1 条施す。頭部から体部にかけてタタキの後にカキメを施す。色調は外面褐色、内面淡黄褐色。復元口径 22.2cm、残高 9.1cm。41 は頭部下位はタタキの後にカキメ、内面は当て具痕が残る。色調はにぶい赤褐色。復元口径 19.6cm、残高 7.9cm。42 は頭部から体部にかけてタタキの後にカキメ、内面は当て具痕をナデ消す。色調はにぶい褐色。残高は 9.3cm。41、42 は外面口縁部下位に凸線 1 条、41 は内面に凹線状の沈線を 1 条施す。43 は外面タタキ、内面当て具痕。44 は外面タタキ後にカキメを施し、内面は当て具痕。45 は底部。丸底を呈し、外面は指オサエによる整形後、タタキを施す。内面は指頭間の高まりを中心に当て具痕が残る。外面周囲にはススが付着しており、被熱がある。46 は高坏。外面は軸軸目がつく。坏部内面には同心円状の当て具痕が残る。色調は淡黄褐色。脚部最大幅 7.5cm。47 は焼土塊。後述する鍛冶関連遺物の混入と考えられる。48、49 は木製品で、最下層の 11 層から出土した。紡織に関連する木の腕木と考えられる。工字形に組み合わせて使用され、48 と 49 は対になる可能性がある。木製品の左右、円柱部分の表面は平部に仕上げられる。中央は支え木を挿入するためにくり抜かれ、その内部に支え木の一部が残存する。支え木の本体は出土していない。支え木を固定するための木製の留め具は 48、49 とともに差込まれた状態出土したが、49 の留め具は残存状況が悪く、図版のみで実測図に示していない。

第 4 号溝 (第 11 図)

調査区南側に位置し、方位は N-33.2

°E である。断面形状をみると、土坑のようにもとれるが、平面では第 3 号溝と平行しており、溝と判断している。東西ともに調査区外に伸びており、幅は約 0.8 m である。基底部は平坦になっている。溝の埋土は、3 層と 4 層が該当すると考えられる。3 層はにぶい黄褐色の粘質土で、4 層は黒褐色粘質土。双方ともにしまりが強い。

図示していない東壁の土層は、西壁の土層と違い、焼土が多く含まれる。また、遺物は東側にまとまって出土した。50 の中で 52 の上に 53 が重ねられた状態で、51 は 50 の北側に横たわる状態で出土した。遺物に付着したススや被熱痕の位置から、重なった状態で熱を受けたと推察され、何らかの祭祀行為であったと考えられる。なお、遺物が出土した東壁の土層は図版に写真を掲載している (P22)。

第 4 号溝出土遺物 (第 12 図)

50～53 は土師器。50、51 は丸底の甕。50 は口縁部が強く外反する。外面の体部から底部にかけて荒いハケメの後にナデ。頭部はナデ、内面はヘラケズリを施す。色調はにぶい褐色で外面にススが多く付着する。焼成は甘く軟質。復元口径 21.7cm、器高 20.5cm、胴部径 20.0cm。51 は外面頭部から底部にかけて縦位のハケメ、頭部から口縁部は内外面ともにナデ、内面体部は縦位のヘラケズリ、底部にかけては指オサエ。色調はにぶい褐色。断面図のように重なった状態で出土し、表面を観察するとススの痕跡が見られるが、50 と重なっていた部分にはススが付着しない。口径 13.1cm、器高 13.2cm、胴部径は 13.0cm。52 は塊。外面は荒いヘラケズリの後に荒いハケメで消す。内面は縦位のヘラナデで、ヘラ状工具を当てた痕が線状に残る。色調は褐色で外面全体にススが付着する。口径 11.5cm、器高 6.2cm。53 は鉢。外面は体部から底部がヘラケズリ、頭部から口縁部は内外面ともにナデ、内面は横位のナデ。色調は外面がにぶい褐色で一方、内面は黒色を呈しており、黒色処理を施している可能性が高い。また、口縁部を意図的に削っているとみられる。口径 10.3cm、器高 7.3cm。

土坑

第 1 号土坑 (第 13 図)

調査区の中央よりやや南側に位置する長方形の土坑である。調査時は包含層として掘削を行ったが、緩やかな掘り込みをもち、磨減が少ない状態の良好な遺物が一括して出土したため、土坑とされている。南北長約 2.6 m、東西幅は東側が調査区外に伸びているが、調査範囲内では約 1.4 m を測る。深さは北が浅く、南側が深い。最深部で 0.2m を測る。

第 1 号土坑出土遺物 (第 14 図)

54～66 は須恵器。54～56 は坏蓋。54～56 は体部に沈線状の段が形成され、口縁部に明確な段をもつ。55 は内面天井部にうすく当て具痕が残る。54 は口径 14.3cm、器高 4.7cm。55 は復元口径 14.3cm、器高 4.5cm。56 は復元口径 13.3cm、残高 2.5cm。57～63 は坏身。57 は口縁端部の段は消失する。内面底部には当て具痕が残る。口径 11.8cm、受け部径 14.2cm、立ち上がり高 1.4cm、器高 5.2cm。58 は口径 13.1cm、受け部径 15.8cm。器高は 5.1cm。59 はにぶい褐色を呈し、赤褐色の粒も含まれていることから、赤焼土器の可能性もある。60 は外面体部は手持ちヘラケズリ。復元口径 12.8cm、立ち上がり高 1.3cm、残高 2.9cm。61 は口径 11.5cm、器高 3.2cm。62 は口径 11.0cm、器高 4.4cm。57、58、60、61 は立ち上がり部と受け部の間に溝状の凹みが残る。64、65 は甕。64 は内外面ともに口縁部から頭部にかけて横位のナデ、頭部は外面はタタキ、内面は当て具痕。復元口径 16.6cm、残高 3.9cm。65 は底部。底部と体部の接合痕を境に調整が異なる。外面は接合痕より上位が縦位のタタキ、その後約 1.0cm 程度の幅でカキメ状の沈線を施す。沈線と対応するように内面では横位のナデ状のラインがみられる。外面の当て具痕は接合痕の上位と下位で方向が異なる。色調は明オリーブ灰色。焼成はややあく軟質。66 は長頸甕。頭部に飾帯状文が巡る。67 は軟質系土器の可能性のある平底の鉢。外面上位に一部タタキが残る

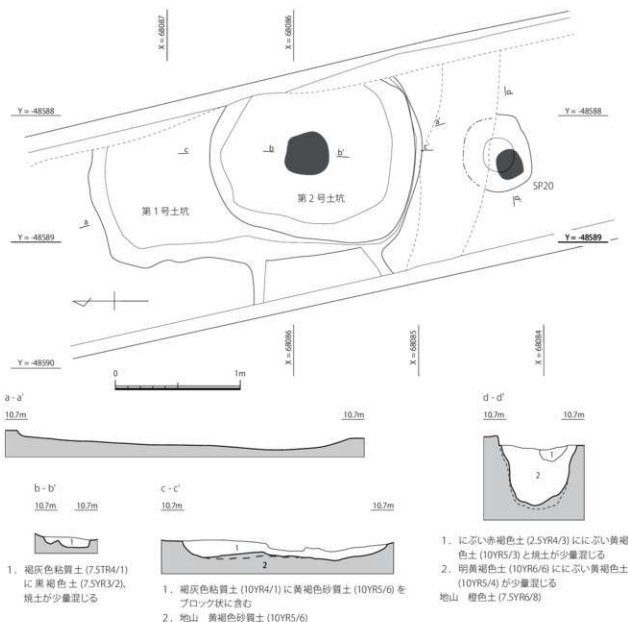
が、多くは磨滅している。色調はぶい褐色、焼成はあまく、もろい。復元底径12.4cm、残高3.5cm。68～73は土脚器。68は壺。口縁部から頸部にかけては内外面ともに横位のナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ。復元口径14.8cm、残高7.9cm。69～72は甕。69は内面ヘラケズリ。復元口径13.4cm。70は口縁部から頸部にかけて横位のナデ、体部外面は縦位のハケメ、内面はヘラケズリ。復元口径12.9cm。71は口縁部から頸部にかけて横位のナデ、頸部外面の屈曲部にハケメの痕跡が残る。内面はヘラケズリ。72は口縁部内面に横位のハケメ、体部はヘラケズ

リ。73は甕。外面は縦位のハケメ、内面は磨滅により不明。甕の把手は取り付け型。74～77は赤焼土器。74～76は甕。74は口縁部は内外面ともにナデ、外面頸部から体部は縦位のハケメ、体部から底部にかけて横位のハケメ、内面はヘラケズリ。復元口径は14.8cm。器高は12.2cm。75、76は口縁部から頸部にかけて内外面ともに横位のナデ、体部は外面縦位のハケメ、内面ヘラケズリ。74は復元口径17.3cm、残高10.4cm。75は復元口径19.6cm、残高7.4cm。77は器台で、軟質系土器の可能性がある。外面に2条の沈線を有し、その上位が横位のナデ、下位に横位のタタキ、

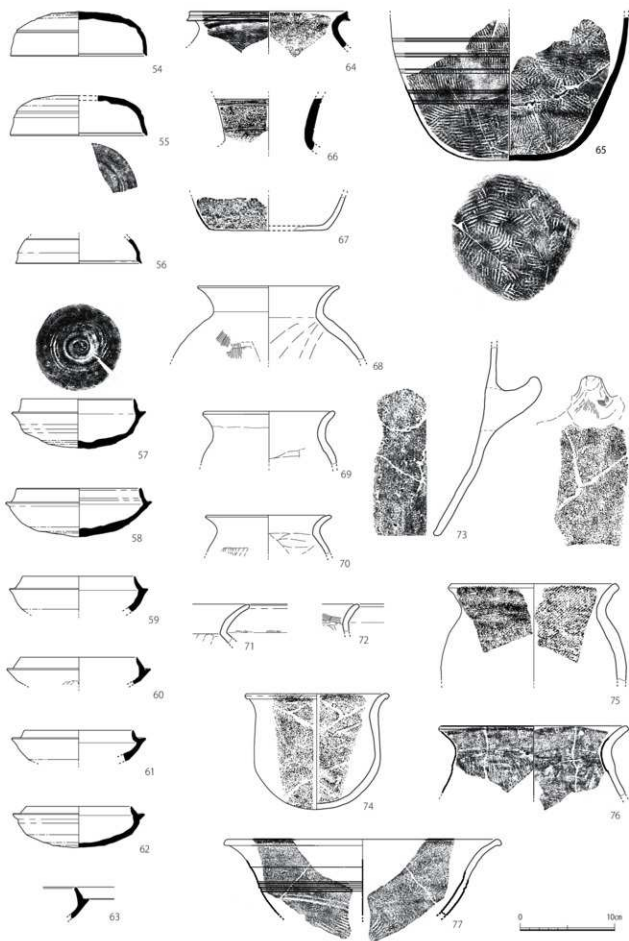
内面は上位が横位のナデ、下位に当て具痕が残る。焼成はややあまく軟質、色調は橙色と灰白色の2色からなる。復元口径29.0cm、残高8.0cm。

第2号土坑 (第13図)

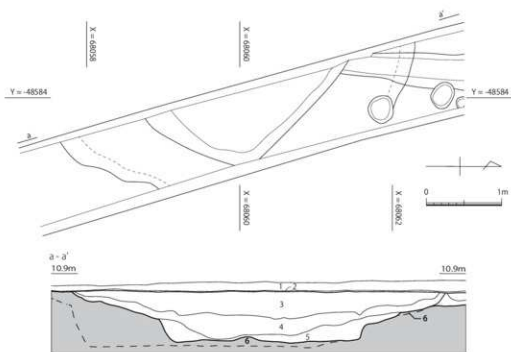
調査区の中央よりやや南側に位置する。第1号土坑に切られる隅丸方形の土坑。南北長1.6m、東西幅は東側が調査区外に伸びるが最大1.2m。底面は中央部が高く、南北が深い。深さは最大で0.2m。中央に焼土が混じる砂のような遺構が存在する。遺物は縄文土器が出土したが、図示できるものはない。



第13図 第1号土坑断面図、第2号土坑平面図・土層図、SP20土層図 (1/30)

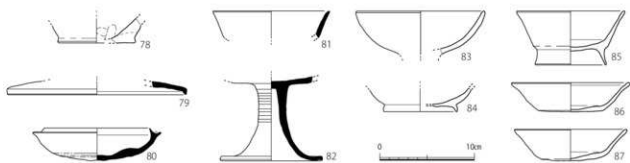


第14図 第1号土坑出土遺物実測図(1/4)

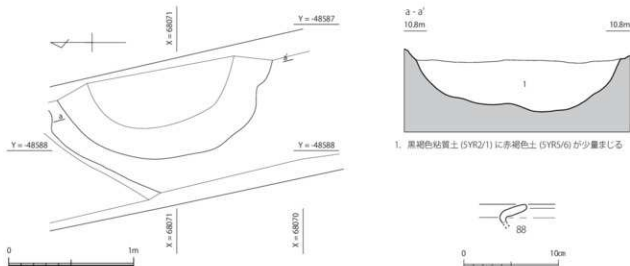


1. オリーブ褐色土 (2.5Y4/4) 礫が多く混じる
2. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまりが強い
3. にぶい黄褐色粘質土 (10YR4/3) しまりが強い 礫が多く混じる
4. 黒褐色粘質土 (10YR3/2) しまりが強い 礫が多く混じる
5. 稲灰色粘質土 (10YR5/1) 地山の土が混ざり込む
6. 地山: 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)

第15図 第3号土坑平面図・土層図(1/50)

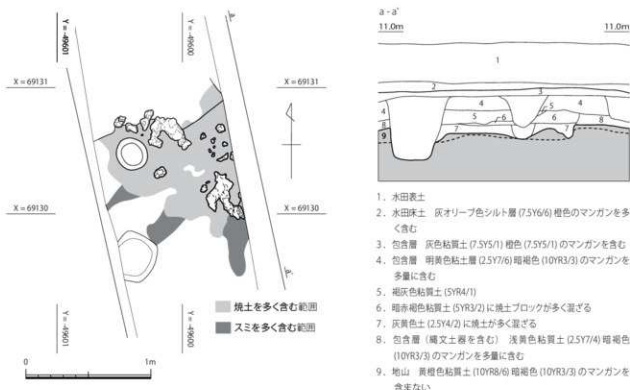


第16図 第3号土坑出土遺物実測図(1/4)



1. 黒褐色粘質土 (5YR2/1) に赤褐色土 (5YR5/6) が少量まじる

第17図 第4号土坑平面図・土層図(1/30)、出土遺物実測図(1/4)



第18図 鍛冶遺構平面図、土層図 (1/30)

第3号土坑 (第15図)

調査区南側に位置し、第1号溝を切る。二重の掘り込みになっており、南北ともにテラス状の段をもつ。土坑は隅丸方形になると考えられる。検出当初は掘方ラインが確認できなかったため、包含層として掘り下げているが、土層断面で掘り込みを確認した後に土坑と判断した。

遺物は3層と4層土層の出土である。4層下層と5層出土遺物は包含層出土遺物と混在したために示すことができない。

第3号土坑出土遺物 (第16図)

78は赤生土器。内面は指オサエ。色調は内外面ともに浅黄褐色。復元底径は8.1cm。79～82は須恵器。79は坏蓋。復元底径19.0cm、残高14.4cm。80、81は坏身。80は立ち上がり部と受け部の間に溝状の凹みがあり、底部外面は回転ヘラケズリ。復元口径11.2cm、立ち上がり高0.5cm。81は復元口径12.4cm。82は高坏。復元底径は11.0cm。83～87は土師器。83は高坏。坏部のみ出土だが、脚部につながると考えられる屈曲部がわずかに残る。復元口径は13.4cm。84、85は高台付きの坏身。84は底部ヘラ切り。復元高台径7.8cm。85は復元口径13.3cm、復元

高台径7.5cm。86、87は坏。いずれも回転ナデ、底部外面はヘラ切り。86は口径12.4cm、器高は3.1cm。87は口径11.9cm、器高3.3cm。85～87は内側にスガがついており、灯明皿として使用した可能性が高い。

第4号土坑 (第17図)

調査区の南側に検出した。南北幅約1.7m、東西幅約0.7m。東側は調査区外に伸びている。深さは約0.5m、埋土は黒褐色粘質土の単層。

第4号土坑出土遺物 (第17図)

88は土師器の甕。頸部はくの字状に屈曲する。外面は横位のナデ、内面は横位のハケメ。色調は内外面ともに、ぶい棕色。焼成は良いが、軟質気味。

その他の遺構

SP20 (第13図)

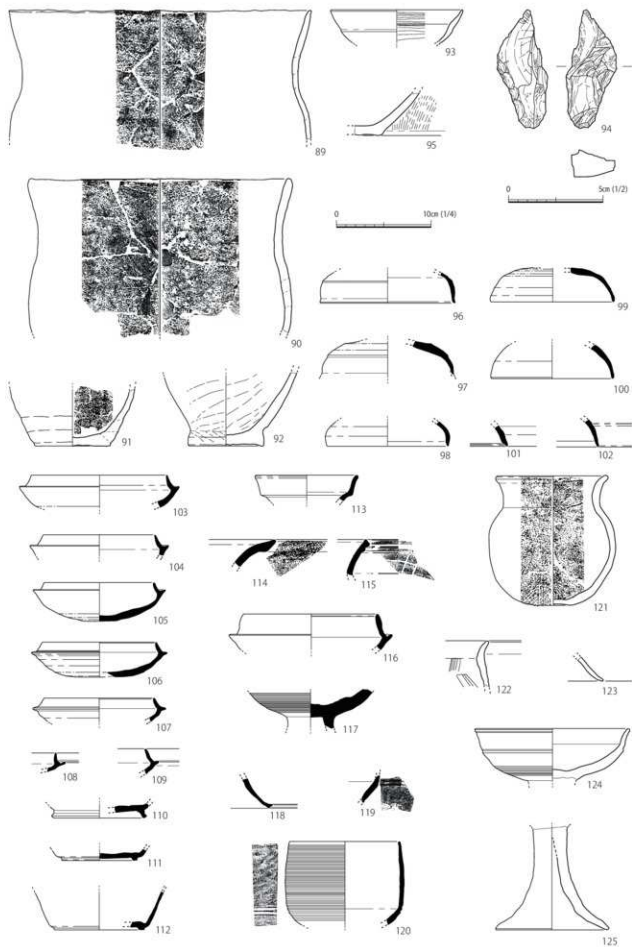
第1号土坑、第2号土坑のすぐ南、

約0.3mの地点で検出した深さ約0.6mの円形のビットである。平面でビットの内部に焼土混入が確認できた。焼土部分は中央より南西側に広がる。底まで混入しておらず、約0.1mの深さまで確認できた。遺物は出土しなかったため時期は不明。

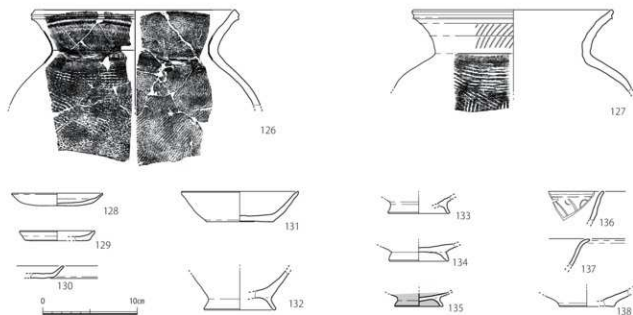
鍛冶関連遺構 (第18図)

調査区の北側に検出した。土層図では6層、7層が8層を切込む状況を示しているが、掘削段階では湧水があり、平面で掘方を確認することができなかった。焼土周辺や4層を掘り込むビット、4層、5層からも遺物が出土しておらず、時期は不明。8層は縄文土器を含む包含層である。

鍛冶関連遺構では、焼土塊がU字状に配置された遺構を2基検出した。そのうち南東に位置する1基のすぐ脇から送風孔と思われる穴の空いた焼土塊が出土した。九州歴史資料館においてCTスキャンで分析したところ、穴の空いた焼土塊の内部には混入品はなかったが、その他の焼土塊には植物の茎や種子、木の棒が混入している状況を観察できた。また、穴の空いた焼土塊には製作時に発生するヒビがあり、他の焼土塊とは異なる



第 19 図 包含層出土遺物実測図 (1/4, 94 のみ 1/2)



第20図 包含層出土遺物実測図(1/4)

ることがわかった。

包含層から鉄滓も出土しており、この鍛冶用土道横所産の遺物と推察される。焼土塊と鉄滓は実測図を掲載していないが、図版に示している(P29)。

包含層

包含層は調査区全体に広がるが、磨滅する遺物が少ないことや、完形に近い遺物なども多く出土していることから、遺構を包含層として掘削している可能性も危惧される。

包含層は、10世紀前後の遺物を含む包含層、須臾器や土師器を含む包含層、縄文土器を含む包含層の3層がある。縄文土器を含む包含層は現地で層位確認できたが、他の包含層は掘削段階では層位の判別が困難であったため、一括で取り上げた。

包含層出土遺物(第19、20図)

89～93は縄文土器。89～92は縄文土器のみを含む包含層からの出土である。89～92は粗製深鉢。89は外面は磨滅のため不鮮明だが、横位の条痕が残る。内面はナデ。胎土は石英を主とする砂粒、褐色系の粒を多く含む。復元口径31.8cm、残高13.6cm。90は外面は横位のナデと斜位のナデ、下位は擦過痕が残る。内面はナデ。色調はぶい褐色、焼成は良いがやや軟質。復元口径

27.3cm、残高16.3cm。91は平底を呈し、外面はナデ。内面は横位の条痕とナデ。色調はぶい赤褐色、焼成は良好。底径7.6cm、残高6.0cm。92は底部は平底状を呈するが、若干の上げ底。内外面ともにナデ。胎土は荒い石英を多く含む。色調はぶい赤褐色、焼成は良好だが軟質気味。底径7.8cm、残高7.9cm。93は精製浅鉢。外面はナデ、内面は強いヘラミガキ、暗文状にヘラの痕跡が残る。色調は外面が明赤褐色、内面が赤褐色。焼成は良好。復元口径14.1cm、残高3.5cm。94はサマカイト製のスクレーパー。厚手であり、横長剥片右側端部の両面から粗い剝離を行い、刃部とする。フレーキングはステップ状をなしており、粗いものと判断される。全長6.3cm、幅2.7cm、最大厚1.4cm。95は弥生土器。鉢か壺の底部。外面は縦位のハケメ、内面はナデ。焼成はあく軟質気味。96～120は須臾器。96～102は坯蓋。96は口縁端部は沈線状の段となり、外反する。復元口径14.2cm、残高3.2cm。97は端部が欠損するが、口縁付近は外反する。残高3.5cm。96、97ともに体部には沈線状の段が残る。97は外面天井部に回転ヘラケズリを施す。98は内面の口縁部に段の名残となる稜をもつ。復元口径は12.8cm。99は外面天井部回転ヘラケズリ。復元口径13.0cm。100は復元口径14.2cm。101は口縁端部に段が形成される。残高は2.2cm。

102は口縁端部はわずかばかり外反し、体部に沈線状の段が残る。残高2.9cm。103～109は坯身。103～105は立ち上がり部と受け部の間に溝状の凹みがある。105、106は外面底部回転ヘラケズリ。103は復元口径14.0cm、復元受け部径16.8cm、立ち上がり高1.3cm、残高3.4cm。104は復元口径11.8cm、残高2.3cm、立ち上がり高1.2cm。復元受け部径14.8cm。105は復元口径11.6cm、器高4.2cm。106は復元口径12.0cm、残高3.7cm。107は復元口径11.6cm、残高2.5cm。108は立ち上がり高1.0cm、残高2.0cm。109は立ち上がり高1.4cm、残高2.7cm。110～112は高台付きの杯。110は高台が高く、外側への踏込張り強い。復元高台径は11.5cm、残高は1.5cm。111、112は高台が低く、112は体部が直線的に開く。111は復元高台径8.0cm、残高1.2cm。112は復元高台径9.8cm、残高4.1cm。113はハツウ。口縁端部はわずかに外傾し、頸部に向けて内側に強く屈曲する。復元口径は10.6cm、残高は2.8cm。114、115は裏。114は口縁部から頸部にかけて緩やかなS字状を描き、頸部には波状文を施す。115は口縁部直下に1条の突帯を有し、頸部にはヘラ記号を施す。116は有蓋高坏。口縁端部に明瞭な段をもち、立ち上がり部と受け部の間に溝状の凹みが形成される。復元口径14.2cm、復元受け部径17.3cm、立ち上

がり高2.1cm。117、118は高坏。117は外部外面はカキメを施す。脚部径5.0cm、脚部器壁厚1.0cm。坏の器壁厚1.4cmあり、大型品であった可能性がある。119、120は地。119、120ともに外面に2枚の沈線を施し、他はカキメ。金属器模倣品と考えられる。121～123は土師器。121～122は甕。121は外面は縦位の粗いハケメ、内面はナデ。外面は熱を受け続けたようで赤色を呈し、内面は口縁部から体部にかけて黒色、底部はふい赤褐色を呈す。胎土は粗い砂粒を多く含む。122は内面縦位のハケメ。122も121と同様に外面は赤色を呈し、内面は黒色を呈す。123は高坏。内外面ともに横位のナデ。124～127は赤焼土器。124、125は高坏。124は口縁端部にわずかに外傾し、口縁部と体部との間に1枚の沈線を施す。体部から脚部にかけてはカキメ。口径16.3cm、残高5.5cm、坏部器壁厚0.4cm～1.0cm。125は高坏。内外面ともに回転ナデ。底径12.0cm、残高11.0cm、脚部径3.5cm。126、127は甕。126は口縁部から頸部にかけて内外面ともにナデ。頸部から体部の外面は横位のタタキを施した後にカキメ、内面は縦位と斜位の当て具痕、一部横位の当て具痕が残る。色調は口縁部から頸部は橙色。体部はふい黄色。復元口径は21.1cm、残高10.2cm。127は頸部に2段の斜線文を施し、体部は横位のタタキ。下位は縦位のタタキの後にカキメ。内面は表面が剥落しているため不明。色調は明赤褐色。復元口径28cm、残高8.6cm。128～134は土師器。128～130は皿。128は底部は回転ナデ。129、130は磨減のため不明。128は復元口径9.5cm、器高1.3cm。129は復元口径6.8cm、器高1.1cm。130は器高1.3cm。131は坏。底部は回転ナデ。色調は明赤褐色。復元口径12.4cm、復元底径7.0cm、器高3.2cm。132～134は高台付きの坏。内外面ともに横位のナデ。132は色調は明赤褐色。復元高台径7.2cm、残高4.1cm。133は色調はふい黄色。復元高台径は6.5cm、残高1.8cm。134は色調は浅黄褐色。復元高台径は6.2cm、残高1.8cm。135は黒色土器B類。底部は回転ナデ。色調は黒色。復元高台径は5.1cm、残高1.9cm。136は龍泉窯系青磁の甕。

口縁部は外反する。外面は無地だが、内面に文様を施す。胎土は灰白色で精良、釉は青味を帯びた緑色。137、138は灰釉陶器の甕。137は口縁端部は外反する。色調は137、138ともにくすんだオリーブ灰色。137は残高2.8cm。138は復元高台径5.5cm。包含層から上記以外にも動物遺存体、鉄滓が出土しており、図版に掲載している (P29)。

おわりに

本遺跡は全長約82m、幅約1.2mと狭小ながらも、多くの遺構を抽出し、遺物の出土量も多い。その中でも特筆すべきは第3号溝である。

第3号溝は幅7.7mと大溝であり、基底も3.6mと幅広くある。南側にテラスを2段設け、溝の基底部が平坦であることから、自然水路ではなく、意図的に掘られた溝であったことを確認した。溝からは木製品をはじめ、複数の赤焼土器などが出土しており、一般的な集落の出土遺物とは異なる状況が垣間見える。須恵器の年代から牛頸編年¹⁾のIV A期が下限と捉えられる。出土した木製品は梓の腕木と考えられ²⁾、紡織が本遺跡周辺で行われたことを示している。

観測関連遺構の抽出も重要である。焼土塊がU字状に配置された遺構を2基確認し、そのうちの1基のすぐ脇から送風孔と思われる穴の空いた焼土塊が出土した。土器は出土しておらず、時期は不明だが、第3号溝から焼土塊の47が出土しており、同時期の可能性も示唆される。また、包含層から鉄滓も出土している。

第4号溝は祭祀遺構である可能性が高い。本文内で示したように、東壁付近に土器を重ねて置き、その状態で熱を加えたことが分かる。何らかの祭祀行為が行われた所産と考えられる。

第1号土坑では、牛頸編年III A期に相当する須恵器や赤焼土器が多く出土した。出土土器の中でも67は平底の鉢で朝鮮半島に由来する軟質系土器の可能性があり³⁾。他にも第2号溝出土の8や第1号土坑出土の77などにもその可能性があ

り、半島との関係が示唆される。

以上のことから、本遺跡は大溝や手工業生産工房の存在、祭祀遺構、木と関係する可能性などが指摘できる。また、本遺跡の南約80mの位置に当該期の倉庫群が発見された戸原御堂の原遺跡の存在が近年と伝えられている⁴⁾。戸原御堂の原遺跡からも赤焼土器や金属器模倣の須恵器などが出土しており、本遺跡と関係が強い遺跡と判断できる。両遺跡の調査成果を勘案すると、官衙的性格や豪族住宅の可能性が浮かび上がり、第3号溝がこのような性格をもつ施設の区画溝であったことが想定できる。しかしながら、現段階において主要建物などは未確認であり、溝のどちら側が施設の中心となるか明確な判断は困難である。

なお、本遺跡の北側約40mの位置に間基1200年と伝えられる伊賀薬師堂⁵⁾が所在するが、関連する遺物は確認できなかった。

狭小な調査範囲ながら、多くの知見を得ることができた。本遺跡は出土土器の年代から精屋郡(評)御である阿志遺跡の前段階に位置付けられ、古代官衙へ移行する歴史的背景を考える上で重要な発見となった。阿志遺跡との関係、本遺跡の評価に関しても、今後の近隣の調査により、さらに明確になってくると思われる。

- 1) 大野城市教育委員会2008『牛頸窯跡群』一総括報告書I—大野城市文化財調査報告書第77集
- 2) 東村純子2011『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- 3) 亀田修一2012『渡来人のムラを考える』『日韓集落の研究』
- 4) 粕屋町教育委員会2000『戸原御堂の原遺跡』粕屋町文化財調査報告書第16集
- 5) 粕屋町教育委員会2009『伊賀薬師堂の歴史』粕屋町文化財調査報告書第29集

図版



調査地全景（南から 奥に見えるのは町指定文化財伊賀薬師堂のクスノキ）



第3号溝全景(南6-5)



第3号溝掘削部(南6-5)



第1号溝土層 (南6-5)



第4号溝遺物出土状況 (北西6-5)



第4号溝東壁土層 (西6-5)



第4号溝西壁土層 (東6-5)



第4号溝完備状況 (西6-5)



第1号土坑遺物出土状況, 第2号土坑検出状況 (南西から)



第2号土坑焼土混入部完撤後 (南から)



第2号土坑焼土混入部土層 (西から)



第2号土坑土層 (西から)



第2号土坑完撤状況 (南から)



第3号土坑土層(北か5)



第4号土坑土層(西か5)



SP20土層(北か5)



掘削関連遺構全景(南か5)



鍛冶間池遺構全景(南から)



鍛冶間池遺構出土部トレンチ東側土層(西から)



第2号溝 7



第3号溝 34



第2号溝 8



第2号溝 9



第3号溝 18



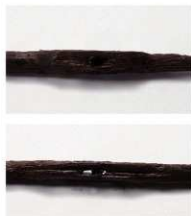
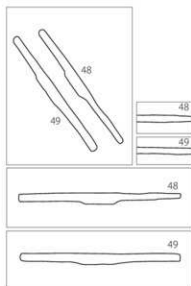
第3号溝 13



第3号溝 25



第3号溝 46





第4号溝 50



第4号溝 51



第4号溝 52



第4号溝 53



第1号土坑 54



第1号土坑 64



第1号土坑 66



第1号土坑 65



第1号土坑 67



第1号土坑 77



包含層 80



包含層 121



包含層 92



包含層 124



包含層 120



包含層 126



包含層 116



包含層 138



鍛冶関連遺構 穴の空いた焼土塊(角度を変えて撮影)



包含層 動物遺存体



包含層 鉄滓

報告書抄録

ふりがな	とばらてらだいせき							
書名	戸原寺田遺跡							
シリーズ名	粕屋町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	高橋幸作							
編集機関	粕屋町教育委員会							
所在地	〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号							
発行年月日	2017年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
戸原寺田遺跡	福岡県糟屋郡粕屋町 大字戸原寺田98-1他	403491	280101	33° 62' 19"	130° 47' 62"	2016.4.14 ～ 2016.6.4	79.29㎡	県道福岡東環状線
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
戸原寺田遺跡	集落、生産 遺跡	縄文時代、弥生時代、 古墳時代、奈良時代、 平安時代		溝、土坑、観治遺構		縄文土器、石器、弥生土器、 土師器、須恵器、赤埴土器、 黒色土器、青磁、灰釉陶器		豪族居宅の可能性
要 約	戸原寺田遺跡は7世紀初頭を下限とする大溝を検出した。大溝の最下層からは紡織に関連する木製品が出土し、大溝の北側からは鍛冶に関連する遺構も検出していることから、本遺跡周辺には紡織や鍛冶に関わる手工業技術者が所在していた可能性を想定できる。また、第1号土坑などから軟質系土器の可能性のある遺物が出土しており、渡来系工人との関連も示唆される。それに加えて、本遺跡の南に位置する戸原御堂の原遺跡から同時期の倉庫群を検出していることなどを勘案すると、第3号溝は区画溝であったと推察され、本遺跡が官衛的 성격や豪族居宅であった可能性が提起される。							

戸原寺田遺跡 粕屋町文化財調査報告書第41集

平成29年3月31日 発行

発行 粕屋町教育委員会
〒811-2314 福岡県糟屋郡粕屋町若宮一丁目1番1号（粕屋町立歴史資料館）
TEL: 092-939-2984 FAX: 092-938-0733

印刷・製本 株式会社三光
〒812-0015 福岡県福岡市博多区山王一丁目14-4
TEL: 092-475-6271 FAX: 092-475-6274